デイを共生型へ

社会福祉法人きしろ社会事業会（神奈川県鎌倉市）は、特別養護老人ホームやデイサービス、地域包括支援センターなどの運営を6拠点で行う。昨年11月、複合型施設「鎌倉プライエムきしろ」のデイで共生型サービスを開始した。同時に、法人運営の「二階堂デイサービスセンター」でも開始している。

社会福祉法人きしろ社会事業会

鎌倉プライエムきしろのデイは1日型で、定員は介護保険の通所介護と障害福祉サービスの生活介護合わせて35名。現在、1日の利用者数は30名以上で安定している状況だという。共生型デイに移行して以降、50～60代の3名の障害者が利用している。また、3月より10代の女性がデイサービスを利用する予定となっている。

共生型デイの開始にあたり、職員は市のサービス管理責任者による研修会に参加。障害者の潜在能力を伸ばすケアマネジメントなどについて学んだ。職員2名が基礎研修を受講し、実務経験など一定の要件を満たせば正式にサービス管理責任者となる「みなしサービス管理責任者」の資格を取得。近隣の障害者福祉施設を見学し、利用者が独りになれる空間も設けた。

▲「鎌倉プライエムきしろ」のデイ

「移行前から精神疾患を持つ利用者がいたこともあり、不安の声は上がらなかった」と鎌倉プライエムきしろ自律支援課・大垣佑輔副課長。

昨年夏より、同法人と鎌倉市、障害者支援を行う拠点である鎌倉市基幹相談支援センターの3者間で、共生型サービスをテーマに意見交換会を複数回実施。「障害者福祉サービスでは、ドアtoドアの送迎ができない」「障害者の入浴支援施設が少ない」など共生型のニーズの高さが明確になったという。

「水福連携」の取り組みきっかけ

法人が参加していた鎌倉市の「水福連携」の取り組みも移行のきっかけとなった。障害者・高齢者福祉施設で海岸に流れ着いた海藻を加工し、これをエサとしてブランド豚「鎌倉海藻ポーク」を育てる。障害者福祉施設との関わりのなかで、共生型サービスへの意識が高まった。

今後、eスポーツなどを取り入れ、年代を超えて一緒に楽しめる場所を作る。23年には市内に共生型デイの新設も控える。

「身体拘束や施設見学時のルールが制度ごとに異なるなど、法整備が進んでいないと感じる。共生型の事業所が増え、整備を進める動きにつながれば」と大垣副課長は語った。